

令和 2 年 6 月 28 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05753・19K20948

研究課題名(和文)台湾における外国籍配偶者の母語に関するフォーマル教育とインフォーマル教育

研究課題名(英文) Concerning with the formal and informal education of foreign spouses' mother language in Taiwan

研究代表者

Huang WanChien (Huang, WanChien)

同志社大学・社会学研究科・助手

研究者番号：60823440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：私の研究は、台湾社会においてマイノリティと呼ばれる人たちの結婚や子育てにおけるアイデンティティの問題や、家庭・学校における意識の変容を着眼していた。台湾をフィールドとし、国際結婚家庭における母親の母語と文化、また「新台湾之子」と呼ばれる子どもの学校での適応、母語学習の問題を論じてきた。

一方、学校での「たいまつプログラム」の母語教育の試行の実態を把握するため、小学校へ訪問し、校長、母語教師、生徒へのインタビューと授業観察を行った。「たいまつプログラム」という母語教育政策は、外国籍配偶者の母語・文化に対して、社会全体がその重要性を認識し始めた重要な転機だと明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

台湾と同じような国際結婚移民の背景をもつ、東南アジアと中国本土からの女性配偶者を迎える日本では、国際結婚家庭における親の言語使用方略、子育ての教育方針などの研究報告はあるが、台湾のような、国際結婚家庭や外国籍配偶者をサポートするため、日本の行政や民間団体からの支援的行動や活動に関する研究は少ない。本研究の研究成果は、約13% - 15%が国際結婚という国際結婚先進国である台湾の問題、外国籍配偶者への多様な支援から、その国際結婚家庭で生まれた子どもへの教育まで、特に、言語や文化の継承についての家庭・学校・社会の問題を元に、日本の国際化について考えることは意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：My study focus on the Minority' situation in Taiwan society, who are encountering international marriage, having kids, identity issues, and even their concepts or ideals of family and school varies. By the field investigation in Taiwan since 2014, the study explores the mother language and culture of female foreign spouses in international marriage, and also their children's (who are so called "New Taiwanese") learning adaptations and mother languages learning issues.

On the other hand, in order to fully understand the real situation of 'the National New Immigrants Torch Program', which enforced mother language education in Taiwan school. I arranged to visit school, to observe how to teach in class, and to have face to face interview with principal, teachers in charged to teach mother language and students. This study realizes "the National New Immigrants Torch" as the key point for Taiwan society to re-recognize the importance of foreign spouse's mother language and culture.

研究分野：教育学

キーワード：国際結婚 台湾 外国籍配偶者 母語 継承 新住民 言語教育

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

ここ二十数年の間、アジアにおける台湾、日本、韓国は受け入れ側の国として、また、中国本土と東南アジアの国々は送り出し側の国として、女性の国際結婚移民が注目されている。この受け入れ側の三ヶ国の国際結婚を巡る諸問題と経緯などは、類似するところが多い一方、相違するところもあるため、相互の情報交換には、大きな意義があると思われる。特に、現在、国際結婚の先進国としての台湾における動向や支援策などは、日本や韓国では見られないものがあるため、その現状や問題点などを把握する研究を国際的に発信する意義がある。そのため、本研究では、台湾の国際結婚家庭で生じた新たな課題と考えられる、外国籍配偶者の母語に関するフォーマル教育（学校内での制度化された教育）とインフォーマル教育（家庭内教育、学校以外でのレジャーなどの日常活動の学習）の両者に焦点を当てて、さまざまな具体的と潜在的な問題を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は、台湾における外国籍配偶者の母語に関するフォーマル教育とインフォーマル教育の両者に焦点を当てて、さまざまな現状と実態を中心に多面的・多角的に考察して明らかにすることを主要な目的とする。

3. 研究の方法

以前、「たいまつプログラム」を実施した経験がある四つの小学校（都市と過疎地）を選定して、校長や行政職員や母語教師などと事前に協力の約束を取り付け、彼らを訪問する。母語のフォーマル教育のため、学校側の具体的な準備作業やカリキュラムや授業の実施方法などの情報を収集する。また、インタビュー調査と質問紙調査を行うための、それぞれの質問項目を作成する。母語授業が始まった後、定期的に授業観察を行い、母語教師の教授の様子と生徒の学習状況など、その言語習得の過程を記録する。

4. 研究成果

(1) 論文および著書

①論文：

「台湾の『たいまつプログラム』における教育方法—母語教育現場の教師と生徒の声—」

概要：

台湾の教育現場に立つ教師たちの中で、生徒の母語学習時間が足りない、より増やしたい、また、児童生徒に適切な母語教材が必要だという声が高まっている。その一方、「たいまつプログラム」の母語教育コースを受けた国際結婚家庭で生まれた生徒をインタビューした結果、家庭内で母語を使用し、母語で会話する頻度が増えたりするという現状が明らかになった。つまり、これまでの国際結婚家庭で外国籍の母親の母語を使用していないという状況が変わりつつある。

②共著：『アジアの質的心理学—日韓中台越クロストーク—』

執筆箇所：第11章「国際結婚家庭における母親の母語継承に関する価値観—台湾でインタビューからみえてきた現状と課題—」

概要：

多言語多文化の台湾における国際結婚家庭での、母親の母語継承意識、ならびにその子どもたちの意識に焦点を当て、マイノリティである東南アジア出身の母親が、家庭内でどのような意識で母語を捉えているのか、一人ひとりへのインタビューから明らかにした。母親自身が母語に対して高い意識をもち、積極的に継承していこうとしても、中には、外国籍の配偶者、つまり台湾の夫やその家族、あるいは、台湾社会における偏見によって、葛藤している様子が浮かびあがってきた。

③論文：

「台湾における東南アジア諸言語を巡る教育政策に関する評価と考察」

概要：

2010年頃前まで、たとえ台湾政府は外国籍配偶者への多くの支援策を立て、あるいは、彼らの母語・文化を子どもに継承させるような教育政策の方向性を打ち出しているにもかかわらず、とりわけ東南アジア籍の配偶者の母語や文化を抑圧し軽視していた。それに、その抑圧や軽視される状況は、台湾社会の一般人からだけではなく、彼女ら自身も、家庭内で自分の母語と文化継承に対する意識や行動に関して消極的な態度をもつ場合がほとんどであった。こうした社会背景があった台湾は、なぜ、2019年の今、政府は「新住民言語」と呼ばれる東南アジア出身の母親の母語をフォーマル教育のカリキュラムに正式に取り入れることを定めたか。なぜ、わずか10年間の間、東南アジア諸言語学習は台湾社会で重視・発展されてきたのか、その台湾政府の動向と支援策といった背景や経緯などを明らかにすることが重要だと考えられる。

本研究の結果によると、近年、台湾において東南アジア諸言語を発展させることは、以下の5

点がわかった。①国際結婚家庭において東南アジア出身の母親の母語文化を継承させられる②新住民子女が、将来の台湾と東南アジアの間の架け橋としての人材を育成するため、東南アジア諸言語が話せるように育てる③マイノリティである東南アジアから来た外国籍配偶者の母語と文化を尊重するという意義がある。さらに、2019年開始の「新住民言語」教育は、一旦この言語教育が定着したら、④台湾は多言語多文化社会へ、より一歩邁進するだけでなく、多文化共生社会を実現できると考えられる。つまり、⑤多文化共生社会を実現させるために、「新住民言語」という教育から着手する必要があると考えられる。

④論文：

「台湾の『言語』学習領域における『新住民言語』カリキュラムを考察する」

概要：

台湾は2014年8月から正式に「十二年国民基本教育」を実施した。「十二年国民基本教育課程綱要総綱」による「言語」学習領域において、初めて「新住民言語」が取り入れられた。「新住民言語」というのは、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、ミャンマー語、カンボジア語、マレーシア語、フィリピン語、という七カ国の言語である。本研究は、2019年度から実施する「新住民言語」カリキュラムに焦点を当て、台湾政府が定めた「新住民言語」に関する教育を理解することを目的とする。「新住民言語」の教育理念から、教育目標、開講準備、児童の学習目標などの規定やプロセスを明らかにする。また、「新住民言語」カリキュラムの教育上の位置づけを考察していく。

2019年9月から、児童は「新住民言語」授業を履修することになり、たとえ児童一人だけでも履修登録すれば、「新住民言語」授業を開講する必要がある。現在、「言語」学習領域の履修規程によって、小学校における「本土言語」という教科は週に1コマ選択必修である。そして、「本土言語」という教科において、「郷土言語」と「新住民言語」という二つの科目がある。児童は、「郷土言語」か「新住民言語」どちらかの“母語”授業を選択して履修することが必要である。つまり、国際結婚家庭で生まれ育った新住民の児童は、「郷土言語」のみの選択肢から「新住民言語」を履修することになった。言い換えると、台湾の一般人の児童は、閩南語、客家語などの「郷土言語」の学習から、東南アジア諸言語である「新住民言語」を学習することができる。したがって、「十二年国民教育課程」による「言語」学習領域において、「新住民言語」が「本土言語」というカテゴリーに配置されるということから見ると、政府は、「新住民」を台湾の人口構成の一つとして認めている、と言えよう。本来、「新住民言語」は、英語と同様に、外国語教育として見なされるべきだったが、国際結婚がきっかけで、外国語教育ではなく、台湾本土の言語の一つとして取り扱われている。これは政府が言語教育の側面から、一般の台湾人と「新住民」・「新住民」の児童を、台湾の重要な国民として同じように扱う、ということ伝えてくれているのではないだろうか。

(2) 学会などの発表

- ①「グローバル化による台湾の子どもの言語教育に対する一考察」2018.8 第26回大会日本グローバル教育学会（招待講演）
- ②「台湾のマイノリティ言語教育における教師の質に関する考察」2018.8 第26回大会日本グローバル教育学会
- ③「台湾における子どもの言語教育にみる外国籍配偶者の母語に関する過去と現在」2018.11 第15回子ども学会議日本子ども学会
- ④「異なる『声』をどう分析に活かすか—台湾の国際結婚における継承言語の事例から—」2018.12 2018年度異文化間教育学のフィールドワーク研修会
- ⑤「台湾における「母語教師」の授業力を高めるために」2019.8 第27回大会日本グローバル教育学会
- ⑥「台湾における東南アジア言語の発展「たいまつプログラム」から「新住民言語」へ」2019.6 第40回大会異文化間教育文化学会
- ⑦「台湾の結婚移民における継承語の状況」2019.12 京都台湾研究中心第11回研究会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 黄ワン茜 | 4. 巻 0 |
| 2. 論文標題 国際結婚家庭における母親の母語継承に関する価値観 台湾でインタビューからみえてきた現状と課題 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 アジアの質的心理学 日韓中台越クロストーク | 6. 最初と最後の頁 118 - 129 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 黄ワン茜 | 4. 巻 27 |
| 2. 論文標題 台湾の「たいまつプログラム」における教育方法 母語教育現場の教師と生徒の声 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 教育文化 | 6. 最初と最後の頁 176 - 194 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 黄ワン茜 | 4. 巻 52 |
| 2. 論文標題 台湾における東南アジア諸言語を巡る教育政策に関する評価と考察 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 言語文化学会論集 | 6. 最初と最後の頁 59 - 72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 黄ワン茜 | 4. 巻 132 |
| 2. 論文標題 台湾の「言語」学習領域における「新住民言語」カリキュラムを考察する | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 評論・社会科学 | 6. 最初と最後の頁 1-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 グローバル化による台湾の子どもの言語教育に対する一考察 |
| 3. 学会等名 日本グローバル教育学会第26回全国大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 台湾のマイノリティ言語教育における教師の質に関する考察 |
| 3. 学会等名 日本グローバル教育学会第26回全国大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 台湾における子どもの言語教育にみる外国籍配偶者の母語に関する過去と現在の変化 |
| 3. 学会等名 日本子ども学会学術集会第15回 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 異なる「声」をどう分析に活かすか 台湾の国際結婚における継承言語の事例から |
| 3. 学会等名 異文化間教育学のフィールドワーク研修会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 台湾における東南アジア言語の発展 「たいまつプログラム」から「新住民言語」へ |
| 3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 台湾における「母語教師」の授業力を高めるために |
| 3. 学会等名 日本グローバル教育学会第27回全国大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 黄ワン茜 |
| 2. 発表標題 台湾の結婚移民における継承語の状況 |
| 3. 学会等名 京都台湾研究中心第11回研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|